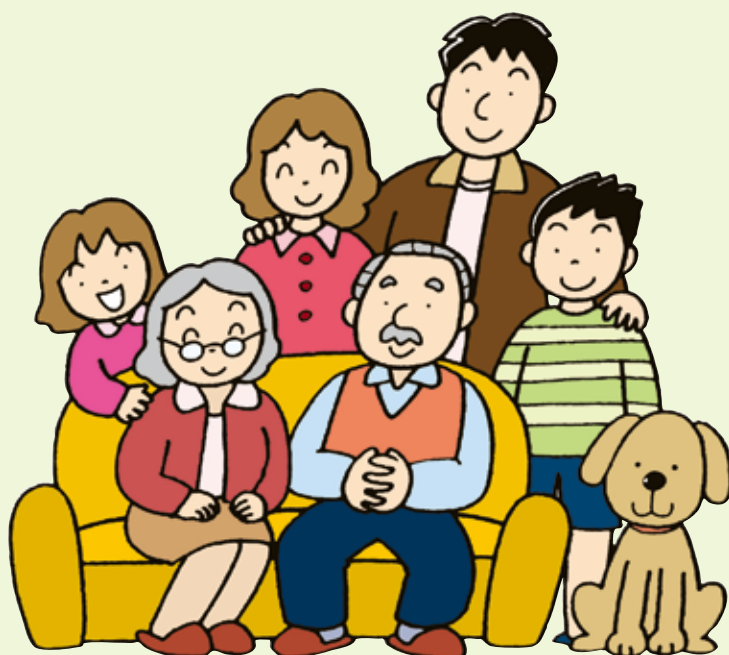


あか
明るいまちづくりをめざして

みんなで一緒に考えよう

「パラリンピックから考える人権」



44号

新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

パラリンピックから考える人権

はじめに

日本では、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控え、障がいのある人や高齢者が利用しやすいように、施設や交通機関などのバリアフリー化の進展が期待されています。また、開催にともない、言葉や文化が異なる外国人と触れあう機会も多くなることから、互いの違いを認め、すべての人々が幸福に生活することができる未来に向けて共に歩んでいくことが重要になってくるでしょう。

今回は、東京オリンピック・パラリンピック開催を機会に、障がいのある人の人権を中心に、改めて「人権」について考えてみませんか。

パラリンピックはいつ、どんな風に始まったの？

イギリスのルードウィッヒ・グスマン卿が、1944年にストーク・マンデビル病院で、戦争で脊髄を損傷した兵士のリハビリにスポーツを取り入れました。そして、1948年のオリンピック・ロンドン大会と時を同じくして、車いす患者によるアーチェリー大会を開催しました。これが、パラリンピックの原点と言われています。

この大会は、その後、毎年開催され、ついには国際大会として発展していきます。1960年のオリンピック開催国であるイタリアのローマで開催された、国際ストーク・マンデビル車いす競技大会は、国際パラリンピック委員会（IPC）によって第1回パラリンピックと認定されています。第1回大会には、23か国から400人ももの車いす選手が参加し、車いすによるポロやバスケットボールなどの競技が行われました。

パラリンピックは世界最高の障がい者スポーツの祭典

パラリンピックは、回を追うごとに参加国・参加者数が増え、規模も拡大していき、下半身不随に限らず、視覚障がい、脳性麻痺など、体に障がいのあるさまざまな人たちが参加する国際大会というスタイルへと進展していきました。

2000年には「オリンピック開催国はオリンピックとパラリンピックを同時に開催する」ことが正式に決まり、現在に至っています。

パラリンピックが都市にもたらすもの

パラリンピックの価値と精神である「勇気」「決断力」「平等」「鼓舞」は、社会に大きな変化をもたらすきっかけとなっています。

パラリンピックは、開催された都市を中心に、人々のバリアフリーに対する意識を大きく変化させてきました。道路や公共の乗り物といった構造物のバリアフリー化はもちろんのこと、障がいのある人たちや外国人など、さまざまな立場の人々への関心をもつ機会が増えることで、多様性を理解し、互いを尊重しあう心が育まれます。パラリンピックは「多様性と調和」による共生への理解が、開催都市をはじめ社会に根付くチャンスとなっているにちがいありません。

(人権教育啓発推進センター「障害のある人の人権～パラリンピックに向けて～」より抜粋)

泳ぎと行動で環境を変える

近畿大学水上競技部に所属する一ノ瀬メイさん(19歳)は、3月静岡県で行われたリオデジャネイロ・パラリンピック代表選考会女子200メートル個人メドレーで自身の持つ日本記録を4秒以上更新し、初のパラリンピック出場を決めました。



彼女は生まれつき右腕の肘から先がありません。彼女が自身の「障がい」を初めて認識させられたのは9歳頃でした。「競技者として水泳をしたい」とスイミングスクールの「選手コース」に入会を希望しましたが、健常者をしのぐ実力は考慮されず、短い腕だけを見て断られたことでした。その時「本当は泳げるのに…、生まれて初めて障がい者であることを認識させられた」といいます。小学校では、同級生にからかわれることも少なくなく、『ただの腕の短い女の子やったらなめられる。』そういう目線から守ってくれて、自信を持たせてくれたのが水泳でした。そして、彼女が第一線の競技者として強い使命感にかられていることは、障がい者アスリートを取り巻く環境改善だと言います。

「世界選手権の招集所で、海外の選手と話す機会があったんです。」そこで、あ

る選手が『うちは五輪に出る選手と一緒に合宿しているよ』と聞いたとき、「置いて行かれてるな。」と思ったそうです。五輪選手との合同合宿はおろか、彼らと会ったこともない。スイミングスクールへの入会を断られたという話しはいまだに聞きます。「2020年には東京パラリンピックが来ます。でも、東京で知ってもらってからでは遅いんです。」と強い思いを持っています。

小学校の時、英国の大学院に留学した母とともに、父の母国に1年間住んだとき、障がいの有無にかかわらず、練習環境は同じ、コーチは実力で評価してくれました。「英国で見たことを日本で実現させたい思いがすごく強くて、自分が強豪校で練習することで、あとに続く後輩たちにも選択肢を増やしてあげたい」と、そして、自身の泳ぎと行動で、障がい者アスリートに対する社会の見方を変えたいという強い決意で、リオデジャネイロ・パラリンピックに初出場します。

(産経新聞記事より抜粋)

共に生きる社会（共生社会）をつくりましょう

障がいのある人を理解し共に生きる社会をつくるためには、考えるだけでは心のバリアを取り除くことはできません。お互いが一緒に過ごす時間が多くなれば、それまで思っていた「特別な人」という思いこみが消え、みんな同じなんだということに気づくことでしょう。

障がいのある人にとって暮らしやすい社会は、すべての人にとって暮らしやすい社会であるということにも気づくことができます。障がいがある、ないにかかわらず、その人の力を生かして自立した生活や活動ができる社会こそが、すべての人にとって暮らしやすい社会の姿といえるのではないのでしょうか。

9月7日から始まるリオでのパラリンピックを応援しながら、障がいのある人にとって暮らしやすい社会をつくるために、市民一人ひとりが何をすべきか、何ができるかを考える機会にしたいものです。

ひろ ころ おも
広げよう やさしい心と思いやり